

～大学院生活(1)～

こんにちは！地理の南です。何とかニートの危機を回避して大学院進学を決定的にした2月ですが、まだやるべきことは残っていました。教育学部、法経学部で取得し忘れた単位のテストなどを受けて3月を迎えます。実は、4年生の時だけ、早めに成績表を見せてもらうことができます。就職や大学院進学が決まっても単位を取得できなければ思い通りの未来は描けないですね。だから3月上旬に成績表を見せて、足りない単位を何とかさせようとの計らいだと思っています。私も不安だったので文学部の受付に見せてもらいに行きました。大学院進学に必要な単位は揃っていたのですが、いろいろ失敗していることに気づきました。教育学部の「図書館情報学」や文学部の「博物館実習」の単位を落としているが故に、図書館司書と学芸員の資格をゲットできないことになっていました。まあ、この資格は正直どうでもよかったです。一瞬の気の迷いから資格マニアになりかけていただけの話ですからね。でも、もっと恐ろしいことは、教職免許取得に必要な文学部開講科目である「社会学講義」の単位が取れていなかったことです。この劇的な状況が理解できますか？3年生で浪人生の気分にもなりながら総合人間学部で授業を受け、1か月の歳月をかけて60点で合格した刑法の授業など、すべての今までの努力が、たかがと言っては失礼ですが「社会学講義」の単位が取れないだけで水の泡になるんですよ。こんな悲しいことはないですよ！確かに、大学院に行ってからその足りない単位を取得するという手段も残されていないわけでもなかったです。でも、ちょうど制度の改変期で、大学院時代に免許を取ろうとすると、介護実習にも行かなければならないはずでした。教育実習だけでもお腹いっぱいだったので、ここは4年生の間に何とかしておくべきだ、だからこそその成績表早見制度なんだろうと意を決し、「社会学講義」の教授の部屋に電話をかけて、“レポートでも何でもしますから、もう一度単位に恵まれないかわいそうな4年生に愛の手を！”というテンションで

訴えました。すんなりOKをもらえず、「駄目ですよ」と言われて電話を切れそうになりながら、「ちょっと待ってください。僕には…」と、詳細は言えないのですが、それはそれは涙ながらに訴えたものです。すると、教授の著作を読んで、3日以内にその内容について原稿用紙20枚でレポートを書けば、単位を認定してもらえることになりました。T先生、どうもありがとうございました。大学院進学と「地歴」「公民」「社会」の教員免許を獲得して4年生は終了です。ちなみに、卒業式にはちゃんと出ましたよ。入学式は出ませんでした、1回ぐらいはセレモニーに出ないとな、と思って参加しました。高専生までの卒業式と違って、そんなに泣いている人はいなかったと思いますね。就職する人も大学院に進学する人も、みなさわやかな笑顔に包まれていたと思います。

さて、同級生の大半がいなくなり、さみしさ漂う院の1年生になりました。もうピカピカという表現とは無縁の1年生ですけどね(笑)。大学院に進学して、残念なことに気づきました。修士論文作成だけしていればいいというものではなかったのです。再び、文学部で開講されている、自分の専門以外の授業を受け、ある程度単位を取得しなければならなかったのです。何回か前に言いましたが、私は文学部の他の専門の授業は、あまりにも専門性が高すぎて好きになれませんでした。だから、授業の単位が必要と聞いて、かなり萎えました。結局、卒業するまでに、他の専門の授業はほとんど受けていません。受講生のノートを見せてもらったり、試験の内容を教えてもらったりしながら、単位を揃えました。また、中書講読の単位も必要になったのですが、先生が単位がほしかったら1回目の授業に来て名前だけ書いておいてくださいとおっしゃったので、そのようにして、2回目以降参加せず、単位をもらいました。昔の文学部って、単位に関してはお母さんのような優しさがあったのです(笑)。ちょっと言い忘れていましたが、大学院進学を希望する人は、自分の

強者の戦略

専門の単位は学部時代、そして修士課程時代を含めて、きっちり勉強して「優」の単位を取るようにしてくださいね。私は、専門の単位がほとんど「可」だったので、その点でも進学できないのではないかと焦ったりしました。実際進学できましたが、それは教授の母性の表れであることが大きいと思っています。

話はそれでしたが、4月から現代史学と20世紀学は合同のゼミを開いていて、それに参加して1年に1回発表するのが修士1年生の義務になっていました。このゼミは、修士1年生から博士課程3年生、および、聴講生を含め、研究能力に秀でた人たち20数名とK教授・K倉教授・N教授・O教授の4名が構成員でした。最初の方は先輩が発表し、秋ごろから修士1年生の発表にあたっており、私は11月ごろの発表に決まりました。

この毎回の発表は、それはそれはハードなものでした。それが伝わるかどうかわかりませんが、金曜日の5限(16:30-18:00)に設定されていました。最終限に設定されているってことは、いくらでも延長可とを考えてください。この事実を知ったのは1回目のゼミのときでした。まず、先輩の発表は自分の専門とはあまり関係がないので大して興味が持てないにも関わらず、レジュメを渡されて、1時間ぐらいの発表を聞かなければなりません。正直眠気との戦い、っていうか寝ていた時もあったと思います。なので、できるだけ早めに教室に行って、教授から離れた席を確保するのが私の至上命題でした。発表が終わると少し休憩になるので、文学部前の広場のベンチに座って外の新鮮な空気を吸って、5分後ぐらいから、各教授の意見が披露されていきます。4人も教授がいるので、1人が15分話ただけでも1時間かかるんですよ。すでに、発表で1時間、口頭試問で1時間ですから、基本的に2時間はかかるんですよ。正規の授業時間は90分のはずなので、長すぎてびっくりしました。2時間で足りない時もあって、終了したら19:30ってこともあります。3

時間ですよ、3時間！みなさん、研究生活を送ることに大事な能力は「忍耐力」です。このゼミの後に、ちょくちょく教授を交えた飲み会が開かれていたようでしたが、私は研究者の端くれにふさわしくないダメ人間だと自負していたので、参加することはありませんでした。

7月になると、「二十世紀学研究会」という研究会が開かれます。たぶん、私が修士1年生のときに立ち上げられたものだと思いますが、東大や京大、他の大学の先生、現代史学・20世紀学の博士課程の学生のさまざまな発表が行われ、その内容が原稿化されて、『二十世紀研究』でしたかね、そんな名前の冊子にまとめられます。1人45分ぐらいの発表が6回ぐらい行われるので、当日は朝から夕方まで話を聞きっぱなしです。超ハードです。これも眠気との戦いでした。でも、私の意見に惑わされないでください。他の人がどういう風にレジュメを作って、どういう風に話し、どういう意見が出されたのか、ということを実際に聞くことは研究者を目指す学生にとってはとても大事なことです。必ず自分の研究生活に実りをもたらすはずですよ。単に私が怠惰であったと思ってください。

京都は盆地で、7月の暑さは尋常ではありません。黒いスーツに身を固めて、会場である京大近くの会館に足を運ぶことだけで意識が遠のくぐらいでしたが、研究者としての動きを少しでもできたことで満足していたような気がします。

研究的な話をいったん置いて、日常生活についても触れてみたいと思います。文学部自体の授業にはあまり出ませんでした。図書館で様々な書物を読まなければならないので、附属図書館や文学部閲覧室にこもることが多くなりました。就職していった人がいなくなっているのが、友人と会う機会は減りますが、でも、院に進んだ人は図書館によくいるので、昼ごはんや晩御飯は、友人とルネや中央食堂でよく食べるようになりました。友人の研究の話や、友人の工夫の話聞くことは楽しかったですね。そ

強者の戦略

して、友人の優秀さに気づき始めた瞬間でもありません。「今度雑誌に掲載する原稿を書いたんだけど添削してくれる？」なんて言われるようになります。“雑誌に投稿??”って思ったのが正直な感想です。でも大学院に行くと、優秀な学生は学術的な雑誌に原稿を寄稿し、掲載されたりします。その研究成果が認められて他大学での講演につながったり、何かの研究会に所属したり、大学講師として就職を果たしていったりと、人生を成功に導く一つのツールとしての論文なのです。私は、自分の研究分野にどんな雑誌があるかも考えたことがなく、投稿論文など執筆することはありませんでした。だから、こういう話を持ちかけられると、“すごい友人よ!”と感動していました。いま、この友人たちの名前をグーグルで検索すると、どこかの大学の准教授とかになったりしているので、誇らしくなりますね。

アルバイトに関してです。私は、意気揚々と大学院に進学したわけではないので、学費を親に払ってもらわねばいけませんでしたが。大学院の入学金20万、2年分の学費100万円を自分で捻出する必要がありました。一括ではないので、じわじわ稼げばよかったのですが、研究生活に支障をきたすほど働きたくもありませんでした。なので、土曜日とあと平日1日を塾講師、日曜日に塾のテストの採点をすることで、ある程度稼ぎながらしっかり研究できるようにしました。ただ、昼ごはん・晩御飯・定期代も自腹になったので、この時ほどひもじい生活を送っていたときはなかったと思います。一人の昼ごはんの時は、おにぎりとサンドイッチだけとか、素うどんと小ライスだけとか、そんな生活です。腹を膨らませるために素うどんのスープは全部飲み干してましたよ。月曜に買った500ml入りのお茶はいびち飲んで木曜日ぐらいまで使用しましたしね。こんな状態なのに、ある日ひどい事件が起きます。コンビニでお茶と赤飯のおにぎりを買って、いったん文学部の教室に荷物とともに置いて、一瞬トイレに行ってお飯を食べようとトイレから戻ってきたら、

なんと、お茶とおにぎりが消えているんです！信じられないですね、京大の中でたかがお茶とおにぎりが奪われるなんて。悲しみの中再び百万偏交差のローソンに行って、お茶と焼きおにぎりを購入しました。赤飯から焼きおにぎりに変えたのがポイントです。何かちょっと気持ち分かるでしょ(笑)。

では今回は、研究するということがどれほど大変なことなのか、について深く話していきたいと思います。